

ひなんじょでのくらし

しんさいの後、多くの学校では教室や体育館が地いきのひなんじょとなり、しばらくじゅぎょうができなくなりました。人びとはどのような生活をしていたのでしょうか。

1 ささえ合う人びと

地しんがあった夜、ひがいの大きかった地いきの学校には、たくさんの人びとがあつまってきました。電気や水道、ガスなどのライフラインが止まってしまったからです。学校にそなえてあった食りょうや水、毛ふ、トイレットペーパーなどを、みんなで分け合って生活しました。



手おしポンプをおす子どもたち

食じのお世話や身の回りのせいそうも、分たんをきめてきょうかし合いました。

また、ひなんじょなどのでん言ばんを利用して、家ぞくや友だちとたがいにれんらくをとり合いました。



れんらくをとり合うのにやくにたつたでん言ばん (七郷小学校)

2 ひなんじょでの生活

ぼくにもできるよ

よしんがつづく中、ひなんじょとなった小学校の体いくかんで朝をむかえた。先生たちが、アルファ米のごはんをくばってくれた。きのうは、クラッカーと水だった。

ひなんじょでは、先生たちや地いきの人たちが中心になって、朝、昼、夜の食じやぐあいが変わるようになった人のお世話をしていた。毛ふやくだものなどをくばったり、水くみをしたり、いそがしそうにはたらいっていた。トイレの水が出なかつたので、プールから水をくんで、流していた。

「人手がひつようです。だれか水くみの手つだいをしてくれませんか。」と、声がかかると、何人かの学生さんが、すぐに立ち上がった。

「毛ふをくばります。」
「いわれると、ぼくのすぐ近くにひなんしていた学生さんも、」

「よし、手つだつてこよう。」
とうごき出した。ぼくは、そんな学生さんたちのす

がたを、ただ見ていただけだった。

二日ほどして、びょう気のときにお世話になっている、きんじょのおいしやさんが、見回りに来た。

「何かできることはないかと思つて来てみたんだ。けんちゃん、だいじょうぶかい。」

と、おいしやさんに聞かれて、

「はい、元気です。」
と答えた。そう言つてから、ぼくははつとした。そう、ぼくは元気なんだ。ぼくにもできることがあるかもしれない。

つぎの日、

「さあ、水くみをしてこよう。」
と、となりの学生さんがうごき出した。ぼくは、「水くみ手つだいます。」

と、立ち上がった。ぼくだつて、力になれるよ。ぼくは、とつてもさわやかな気もちになった。

(仙台市小学校教育研究会道徳研究部会編
はなむら特集号から 抜粋)